

リウマチ便り

西の京病院 vol.2
2018年8月1日発行

こんにちは、パンナです。
今回は関節リウマチの『診断について』です。
関節リウマチと診断するためにはどのような検査をするのか説明しますね



パンナ

『関節リウマチの症状』

「手がこわばって動かない」「関節がはれて痛い」などがあります。

では病院を受診してからどのようなことをするのでしょうか？

まず、問診で「はれている」「痛みがある」関節の数と「いつからおこっているのか」をみます。

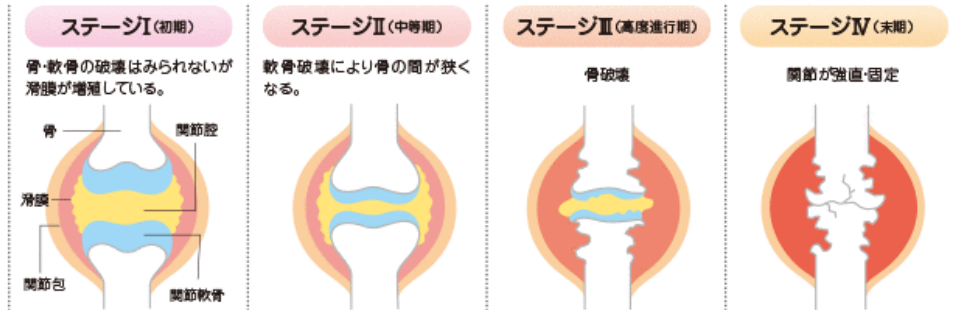
次に「はれている」「痛みがある」関節のレントゲンをとります。



レントゲンでは^{こつ}骨びらん（骨の病変）や関節のこわれぐあい（^{かんせつはかい}関節破壊）

をみます。関節破壊の進行度は4段階にわかれています。

●関節破壊の進行度(ステージ)



次に血液検査や関節の超音波検査（エコー）をおこないます。



どのような内容の**血液検査**は何をするのでしょうか？

- ・**炎症反応（CRP・血沈など）**：炎症の状態を表します。炎症が強いと数値が多くなります。リウマチ以外でも増加します。
- ・**リウマトイド因子（RF）**：ヒトのIgGというタンパク質に対する抗体で関節リウマチの炎症に関係します。リウマチ以外でも増えることがあります。
- ・**抗CCP抗体**：関節リウマチ診断に有用性が高い検査法です。陽性だと関節リウマチである可能性が高くなります。
- ・**MMP-3**：軟骨を構成する成分を壊してしまうタンパク質です。関節内の炎症が強いと増加します。

■ 主な血液検査

病気を診断する	リウマトイド因子（RF）	リウマチの患者さんの多くはこれらの自己抗体が陽性となる。
	抗CCP抗体	
	血沈	リウマチの病状が強い時は値が上昇 貧血などでも高くなる
	CRP	炎症の程度に比例して値が上昇 感染などがおこった時にも高くなる
治療効果や症状の強さ 副作用の有無を調べる	MMP-3	軟骨破壊の程度に応じて高くなる リウマチでなくても陽性となる場合がある
	生化学検査 (肝機能・腎機能・KL-6 ・β-D グルカンなど)	薬の副作用が表れてないかなどを確認する

関節超音波検査

では関節の中の滑膜の炎症の状態をみます。はれや痛みのある関節部の皮膚にゼリーを塗り機械をあてます。痛みもなく20分程度で終わります。絶食の必要はありません。必要があればMRIをとることもあります。

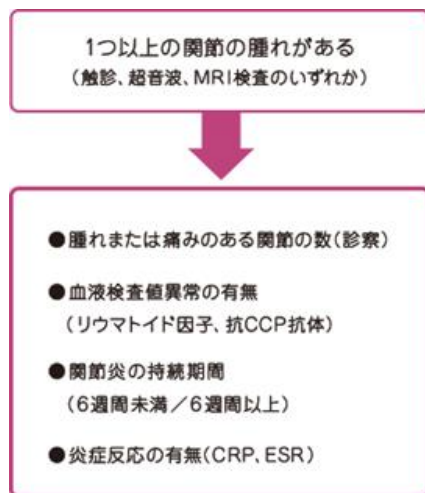


これらの検査の結果、関節が1か所でもはれている。関節炎が6週以上続いている。血液検査値の異常と炎症反応がある。画像診断で骨びらんがあれば『関節リウマチ』と診断されます。

この状態をそのままにしておくと関節の軟骨や骨が破壊され関節が変形したり脱臼します。

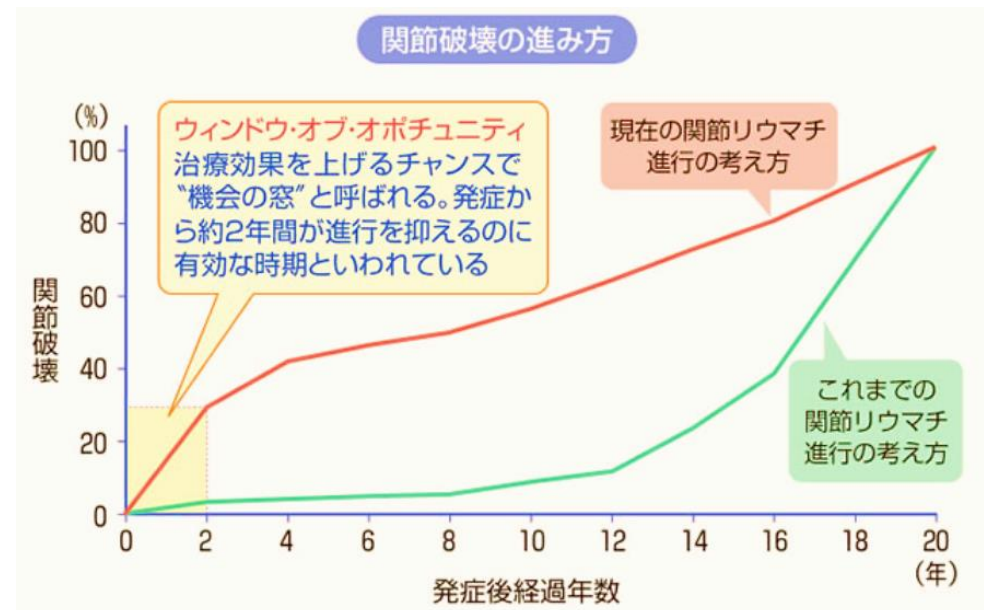
これ以上に関節破壊がすすむと普段の生活の中で家事や育児・仕事に支障が出てきて介助が必要になることもあります。

関節の破壊は関節リウマチ発症後、早期(1~2年)に急速にすすむことがわかってきました。



関節のはれや痛みがひどくなくても関節の内部では炎症が続き関節破壊が進行していることもあります。

そのため早期発見・早期治療が必要です。関節リウマチと診断された方はともに『寛解(リウマチ症状が消失した状態)』を目指して頑張りましょう。



☆次回は「治療について」予定しています。

